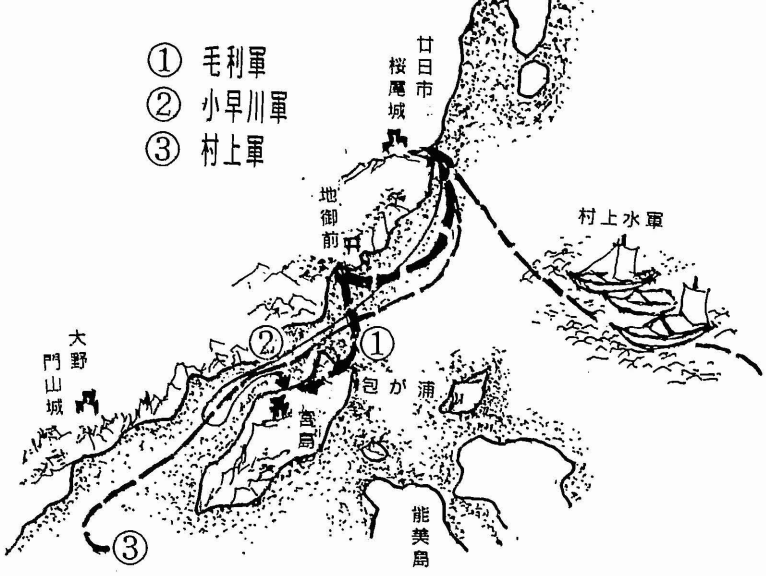
厳島合戦の図（水軍進路図）



一、拝床（ハイトコ）山、又は「灰床山」

此は地御前海岸線、約四㎞の略、中央部に在る。高さ約八〇m前後、海側は傾斜角度、約三〇度位の風化した岩山である。北側には沖山と言う、急角度の瘤山が連なり、山裾には暗礁が多く、要害の地である。山名の由来は判らないが、北裾の弊司（ヘイジ）岩は、南方民族系の語「暗礁」に由来する由（田淵実男説）にて、古い地名らしい。又、古書の内には、南方、山裾にある火立岩を連想して、この山を「火立岩」と呼ぶ者のもある。

一五五五年の八月二十一日に陶晴賢が厳島に進駐後、元就は二三日に此の付近を巡視し（房顕覚書）、二四日には吉田勢が草津に勢揃いし、二八日には灰床山に再移動している。軍勢は地御前神社の北側の谷会い又は田屋浦に隠されていたものと推察される。此の日に待ちに待った村上水軍三百艘が廿日市に来た。

二十九日朝迄に軍の方略を協議、攻勢部所は、①毛利軍は海山を越えて、厳島神社裏の陶軍の背後に向う。②小早川軍は陸岸沿いに大野水道に出で、途中で反転して、神社前で陶軍船団に割込み、陶軍本部の前面に向う（即ち、挟撃）③村上水軍は大野水道を越え、陶軍の退路を絶つ。行動は二十九日の夜陰に開始、戦斗開始は十月一日の「日の出」と同時。

江戸時代末期から、明治中期に掛けて、此の灰床山は、鵯鳥（ヒヨドリ）山と云う。庶民の遊興と化し、旧軍事施設の跡は失われ、最近は西広島バイパスの建設、北辺の階段状宅地化などで、山容が大きく変化した。

江戸時代後期の文化四年（一八〇七）に頼山陽が此処から厳島を遠望して作詩した軸物が残っている（中国新聞、昭和三三年二月三日号）

閉レ門修レ史出レ門遊　逐レ時吟朗上二画接一
落日蒼茫千古事　毛陶戦處是前洲

二、看視（カンシ）山

地御前でも餘り知られていない古地名であって、敵軍の行動を見守るという意味である。拝床山と田尻山との中間で、鰭浜谷と阿品谷とで南北を挟まれ、高さ約四〇m、海辺に俗稱「お上り場」を控えている。情報蒐集の拠点である。即ち、山上からは、前面海上には、似島と厳島など眼下に見え、阿品谷の奥から、更地峠を通れば、大野村海岸方面の情報が入手でき、西方、中山越峠を通れば、山陽道方面の情報が入手出来る。又、看視山の尾根伝いに地御前最高の神能山（標高約三〇〇m）に登れば、安芸郡並に山陽道の遠方迄、見通せる。昔は狼火を上げ、又は、雨乞火を焼いた所でもあった。又、山裾の「お上り場」は、明治の末年頃迄、広島方面から、陸路、宮島に渡る最後の渡船場であった。近年、山の高さが稍低くなったが、昔の姿を残している。

三、田尻山鼻の「運勝（ウガチ）の鼻穴（ハナアナ）

明治以降、海岸に道路、汽車電車の軌道が布設され、田尻の海岸も様変りしたが、それ以前は、田尻山から沖へ、半島が一〇〇m許り、突出し、その先端から三m位の所に、五〇㎝の穴が貫通していた。これは元就が厳島へ渡海するとき、艪音を立てず、縄伝いに渡るため、此の半島の東北端に穴を掘ったものである。

―（以下第一一〇号に続く）―